在外コリアンの音節核のヴァリエーション
―在日・在サハリンの対照社会言語学的考察―

A Comparative Sociolinguistic Perspective on Variation in Prevocalic /j/ and /w/ in Diaspora Korean: Second-generation Korean Japanese and Korean Sakhaliners

吉田　さち・松本　和子

YOSHIDA Sachi・MATSUMOTO Kazuko

1. はじめに

本稿は首都圏の在日コリアンおよびロシア連邦サハリン州（旧「樺太」）の朝鮮語話者コミュニティにおける方言・言語接触とコイネー（接触方言）形成に関する研究の途中経過を報告するものである。

本研究では、20 世紀初頭から現在まで首都圏およびサハリンの朝鮮語変種がどのように変容しているのか、その変化の過程と結果および諸要因を解明することを目指している。具体的には、20 世紀前半に移民によって朝鮮半島各地からもたらされた朝鮮語の諸方言が、首都圏および日本領樺太の地で接触・混合し、さらに現地の日本語やロシア語等との接触も加わりながらどのようなコイネーが形成され、戦後から現在までの間にどのように変容しているのかを調査・考察する。

本稿では上記の研究の中間報告として、首都圏およびサハリンの朝鮮語における音節核のヴァリエーションの事例を取り上げ、対照的に考察する。

2. 研究の目的

在日コリアンにおける朝鮮語の方言変容に関する研究は、これまで大阪府生野区など関西地方で済州道方言話者を主な対象として行われてきた（金美善 2001、康貞姫 2003、宋実成 2010）。関西に次いで在日コリアンが集中する首都圏を調査地とした方言研究や、戦前から最も多くの移民を送り出した慶尚道の出身者を対象とした方言研究は、吉田・松本（2020）以外には管見の限り見当たらない。サハリンの日本語･朝鮮語に関する社会言語学的研究は、真田（2007）、金美貞（2008）、朝日（2012）など極わずかで、いずれも高齢者のみを対象とした事例研究である。また、サハリンの朝鮮語の方言･言語接触、その帰結としてのコイネー形成に関する研究は見当たらない（本研究の一環として進めている樺太日本語の方言接触や朝鮮語・ロシア語からの音声移転に伴う言語変化に関する論考は松本・吉田・高田・奥村（2021）及び松本・高田・奥村・吉田（2021）を参照されたい）。

したがって、本研究では以下の3点を問いとして音節核のヴァリエーションを通じて考察する。

⑴　20世紀前半に日本にもたらされた慶尚道方言が、首都圏において朝鮮語の諸方言や南北の標準語、さらに日本語との接触も加わりながら、どのような変容を遂げているか。

⑵　20世紀前半に樺太にもたらされた朝鮮語の諸方言が、日本領樺太の地で接触・混合し、さらに日本語との接触も加わりながらどのようなコイネーが形成されたのか。さらに、戦後のソビエト連邦下に設立された民族学校における北部朝鮮語話者との接触や、現在の韓国との交流、サハリンの主要言語であるロシア語との接触を通じて、朝鮮語のコイネーがその後どのように変容しているのか。

⑶　首都圏とサハリンにおける朝鮮語の音節核のヴァリエーションを対照した際にどのような共通点・相違点が見られるのか。また、それは言語的・社会的な背景とどのように関わるのか。

本稿では、首都圏とサハリンの朝鮮語話者の方言接触の事例について、それぞれのコミュニティの社会的背景や言語的背景と関連付けた考察を試みる。両コミュニティの方言変容の事例を対照的に分析することで、ディアスポラ朝鮮語における方言接触とコイネー形成の普遍性・個別性を明らかにするための一助となることを目指す。

3. コミュニティの概要と方言的背景

3.1　在日コリアンのコミュニティ

熊谷（2006）によると、朝鮮半島では1910年の植民地化以後、1938年に「第三次教育令」が公布される頃までは初等教育への進学率は低い状態が続き、「国語」としての日本語の普及は進んでいなかったという（熊谷 2006）。その後、日本語の常用運動は全国的に展開され、すべての民衆に日本語を習得させ、公私問わずあらゆる場面で日本語使用を促す「国語全解・国語常用」運動が実施された（熊谷 2006）。

一方、李炯喆（2016）によると、朝鮮語の教育は1938年から次第に廃止されていき、当時の朝鮮人児童の朝鮮語の識字率は低かったという。当時、学校や公的場面では日本語、家庭や民族内でのやり取りは朝鮮語を用いるダイグロシアの状況にあったことが伺える。したがって、在日コリアン一世は家庭や近隣で地元の朝鮮語の方言を第一言語として習得し、学校教育で日本語をある程度学習した後に渡日したと考えられる。

在日コリアン一世の渡航は1910年の韓国併合が契機となり、それまで数千人規模だった移住者の人口は増加の一途を辿り、とりわけ1930年から1940年にかけて約29万8千人から約119万人へと激増した（在日本大韓民国民団 2021）。1937年当時、在日コリアンの本籍地は慶尚南道、慶尚北道、全羅南道、全羅北道、忠清南道の順に多かった（坪江 1965）。慶尚道、全羅道等の南部出身者の人口が圧倒的多数を占めていたのである。韓国政府国家記録院（2019）によると、当時、親類・知り合い等の社会的ネットワークにより朝鮮半島で同郷の者が日本においても同じ地域で共に暮らし、働いて

いたという。

2011 年時点の本籍地は、最も人口の多い道から順に、慶尚南道、慶尚北道、済州道、ソウル特別市、全羅南道である（法務省 2012）[1]。当時も現在も慶尚道出身者が最も多い。次いで済州道出身者が多い。こうした一世の方言背景は南部の諸方言が在日コリアンの朝鮮語変種の形成に影響を及ぼす可能性があることを示唆するものである。

本研究の調査対象者である日本生まれの二世は、方言話者である一世に育てられ、主に家庭で朝鮮語の方言を自然習得したが、日本の学校で習得した日本語がその後の日本での生活の中で優勢な言語になっていった話者たちである。現在では日本語が第一言語であり、朝鮮語は必ずしも話せるレベルではなく記憶の中に断片的に留まっているという話者も多い。

3.2　在樺コリアンのコミュニティ

サハリン（旧「樺太」）は北海道の北に位置する島である。1905 年～ 1945 年までの間、島の北緯 50 度以南が日本領となり、戦後はソ連領に編入された。2010 年現在の全ロシア人センサスによると、朝鮮人は全人口の 5.02%（24,993 人）を占め、ロシア人に次いで人口の多い民族となっている（松本・吉田・高田・奥村 2021：7）。

日本統治時代、日本はサハリンの経済開発を進め、日本人だけでなく多くの朝鮮人もサハリンに渡っていった。サハリンに渡った朝鮮人の大部分は、朝鮮半島の南部（現在の韓国）の出身であると言われている（大沼 1992）。朝鮮人の出身地に関する統計資料は管見の限り存在しないが、韓国学中央研究院（2021）によると「ほとんどが慶尚南道・北道と全羅南道・北道」だとされている。

日本統治時代、朝鮮人は日本人と同じ学校に通っていた（Fajst & Matsumoto 2020: 7）。そのため、日本人と別の学校で日本語教育を受けていた他の先住民族に比べると、日本語の習得に有利だったと考えられる。

戦後、大半の日本人が引き揚げた一方、朝鮮民族は残留を余儀なくされた（大沼 1992）。引き上げの対象にならなかった日本人には、技術者や朝鮮人と結婚していた日本人女性等が含まれていた。残留した日本人も戦後多数派となった朝鮮人コミュニティの一員となっている場合が多いため、本稿ではそうした残留日本人も調査対象者として分析する。

サハリンの朝鮮語話者コミュニティには、次の 3 つのグループが存在するという（朴亨柱 1990）。まず、先住朝鮮人のグループがある。帰国できなかった日本人もこのグループに加わった。戦後は、北朝鮮からの派遣労務者および朝鮮系ソ連人も流入した。朝鮮系ソ連人とは、19 世紀後半までは沿海州（北朝鮮の北部に隣接）に居住していたが、1930 年代後半以降に中央アジアに移住させられた人々で、戦後にソ連人の移民と一緒に中央アジアから渡ってきた人々を指す。

1　法務省（2013）以降は、本籍地に関する情報が公表されていないため、2011 年の出身地に関する情報が最新となる。

先住朝鮮人は、主に朝鮮半島南部の方言話者である。先述した通り、「ほとんどが慶尚南道・北道と全羅南道・北道」だとされている（韓国学中央研究院 2021）。

それに対し、北朝鮮からの派遣労務者および朝鮮系ソ連人はもともと朝鮮半島北部の出身で、北部の方言（沿海州は特に咸鏡道方言）の話者であり、彼らは、1960 年代半ばに民族学校が閉校されるまで民族学校の教員も勤めていたという。これらから、戦後のサハリンにおいて南部の方言と北部の方言の接触が起こったことが推測される。また、1990 年には韓国との国交が成立し、韓国からビジネス等で入ってきた人々がもたらす現代韓国語との接触の可能性も考えられる。

3.3　方言的背景

現在までもっとも広く通用している朝鮮半島の方言区画は、図 1 のような六つの区画であると言われている（李翊燮他 2004）。

本稿の 2 つのコミュニティの調査対象者の主要な出身地である慶尚道では慶尚道方言が話されてい

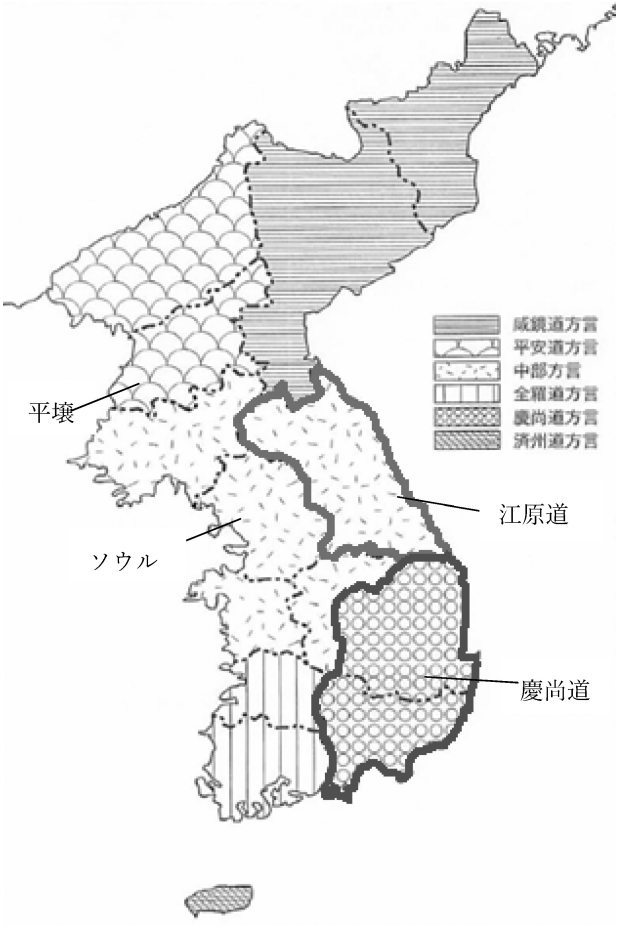

図 1. 朝鮮半島の六大方言（李翊燮他（2004）を改編）　※太く囲んだ地域は慶尚道・江原道。

る。サハリンの調査対象者の出身地で慶尚道に次いでに多い江原道は中部方言に属している。韓国の首都ソウルは中部方言地域に、北朝鮮の首都平壌は、平安道方言地域に含まれる。

朝鮮語における標準語の制定は、日本統治下である 1912 年の「普通学校用諺文綴字法」まで遡る（李翊燮他 2004）。当初はソウル方言を標準語とし韓国ではそれを継承したが、北朝鮮では後に平壌方言を標準語として定めるとともに「文化語」と命名した（李翊燮他 2004）。

本研究では、当時の移民の割合を知る唯一の情報源である人口統計が行政区画ごとにしかないため、行政区画ごとに変異形の使用を考察する。それを起点として、実際の発音を考察し理論的検証を行っていくこととする。

3.4　日本統治時代の方言地図を利用することの研究上の意義

本研究では、日本統治下の 1910 年代から 1930 年代にかけて小倉（1944a，1944b）が朝鮮半島全土で行った方言調査を基礎資料として用いる。これは移住者の方言接触と変容を分析するためには、現在の祖国の方言・標準語との比較だけではなく、移住当時に国外へ持ち出された方言との比較を行うことが重要であるためである（松本 2016）。

中井・亀山（2007）および福井（2017，2018）は、小倉（1944a，1944b）による朝鮮半島全域での方言調査の結果を地図化したものである。これらの地図は、移住当時の方言を知るうえで大変貴重な方言資料である。この資料を活用することで在日・在樺コリアンの持つ「フィーチャープール」（用語の解説は 4 節を参照）が諸方言のどこからの影響なのかという分析が可能となると考える。

4. 分析の枠組み

本稿では旧日本統治領パラオの方言・言語接触とコイネー化の研究（Matsumoto and Britain 2003, 2022）や在日ブラジル人コミュニティの方言・言語接触とコイネー化の研究（松本・奥村 2019）で用いられた理論的枠組みを採用する。

まずTrudgill（1986）やBritain（2018）は方言接触によって新たなコイネーが形成される際にたどる言語的プロセスを類型化し、これらを総称して「コイネー化のプロセス（koineisation processes）」と呼ぶ（松本・奥村 2019：253）。

【コイネー化のプロセス（koineisation processes）】

- 平準化（Leveling）
- 単純化（Simplification）
- 中間方言化（Interdialectalisation）
- 再構造化（Reallocation）
- 複雑化（Complexification）

その中で最も一般的なプロセスとして「平準化（Leveling）」が挙げられる。これは方言混合において多数派の変異形が生き残り、有標な変異形が消失する現象を指す（松本・奥村 2019：253）。この文脈における有標性とは、①新天地において数の面で少数派であること、②世界的に見て稀な言語的性質を有すること、③明確にステレオタイプの対象とされていること、④子供の言語習得において後に習得されるもの等を意味する（松本・奥村 2019：253）。これを在外コリアンのコンテクストに当てはめると、幼少期に親から習得した祖国の方言が、韓流ブームによる韓国ドラマの視聴やニューカマーとの交流を通じて後に習得された変異形によって消し去られるか、あるいは生き残るかどうかを検証していく。

コイネー化の別のプロセスに「中間方言化（Interdialectalisation）」が挙げられる。これは方言混合において、新たな変異形を不完全に習得した結果、インプット方言にはない複数の変異形の中間的な形式が現れる現象を指す。

一方、Mufwene（2001，2008）は方言接触・言語接触の状況下で、様々な方言・言語要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表わす「フィーチャープール（feature pool）」という概念を提唱している（松本・奥村 2019：252）。話者はそうした「フィーチャープール」から既存の要素を選択することもあれば、複数の要素を組み合わせることで、インプット変種にはなかった新たな構造を作り出すこともある（松本・奥村 2019：252）。こうした考え方を本研究に応用するならば、朝鮮半島で習得された諸方言が、インプット要素として移民一世によって首都圏・サハリンへ持ち込まれ、現地で接触を重ねた結果、「フィーチャープール」の中に多様な方言要素が取り込まれたことが予測される。

ここで重要なのは、言語接触の環境下においては「外来言語要素（xenolectal feature）」もさらに加えられる点である（松本・奥村 2019：252-3）。つまり首都圏の在日コリアンの二世の場合、彼らの優勢言語である日本語からの言語要素も「外来言語要素」として彼らの朝鮮語の「フィーチャープール」に含まれることが予測される。一方サハリンでは、樺太時代には日本語が、そして戦後はロシア語が主流言語として使われていることから、日本語とロシア語が「外来言語要素として「フィーチャープール」に加えられた可能性があると考えられる。

さらに、初期の移住者より遅れて入植した集団からの言語要素も考慮する必要がある。そのため、Schneider（2007）の提唱するコロニアル英語変種の形成過程をモデル化した「ダイナミックモデル（Dynamic Model）」の「傍層ストランド（adstrate strand）」の概念を加える。これは初期の移住者よりも遅れて入植する集団からの言語的影響を加味するために用いられた概念で、現在の韓国南部にルーツを持つ在日コリアンの場合、戦後、朝鮮系民族学校へ通った経験のある二世に北朝鮮の言語要素が含まれる場合に「傍層言語要素（adstrate feature）」として扱う。また、樺太時代に入植した多くの朝鮮人は南部出身者だったが、戦後に開校された朝鮮系民族学校では朝鮮北部の出身者から教育を受け、また韓ソ国交樹立以降は韓国からの教育支援を得るようになったことにより、北朝鮮の変種や現代韓

国語の要素が「傍層言語要素」として「フィーチャープール」に加えられた可能性があるものと考えられる。

次に、同じくMufwene（1996）が指摘する「創始者効果（Founder Principle）」という概念がある。これは、新天地で形成される新たな言語変種が、初期の移民のもたらした方言要素を基盤とする傾向を指摘したものである（松本・奥村 2019：253）。つまり、移民一世の方言背景と方言的特徴が、新たなコイネーの基盤となる可能性を示唆するものである（松本・奥村 2019：253）。

最後に「見かけ上の時間仮説」とは、言語使用における年齢差・世代差を「変化の指標」と見なし、若年層の言語使用を「変化の進む方向」として捉える手法である（Bailey 2002）。サハリンに関する先行研究はこれまで高齢層のみを対象としてきたため、変化の方向性を示唆することができなかった。サハンリンの朝鮮語話者コミュニティでは、まだ被験者は少ないものの、30 代から 90 代までの 3 世代からデータを収集したため、サハリンで異なる時代を生きた世代を通じて、サハリンの朝鮮語変種の変化の方向性を探る。

以上の分析の枠組みを用いて、日本語や朝鮮語諸方言が交差する首都圏、および、日本語・ロシア語・朝鮮語諸方言が混合するサハリンで、どのような朝鮮語変種が形成されているのかを考察していく。

5. 調査の概要

5.1 首都圏調査

調査は 2019 年 7 月～ 12 月にかけて調査対象者の自宅、慶尚北道道民会会場、民団支部などで実施した。調査は日本語母語話者、朝鮮語母語話者で実施した。

本稿では、在日コリアン二世 9 名（男性 3 名、女性 6 名）から収集した①アンケート、②語彙調査（翻訳式・なぞなぞ式）を分析する。調査時の年齢は 72 歳～ 86 歳で、全員が家で親から朝鮮語を学んだと証言している。また、9 名中 8 名は両親ともに慶尚道出身者、9 名中 6 名の配偶者が慶尚道出身の親を持つことから、当時の同郷の者同士の強いつながりが伺える。

本研究では先述の通り、日本統治下の 1910 年代から 1930 年代にかけて小倉（1944a，1944b）が朝

表 1. 首都圏調査のインフォーマント

	話者 1	話者 2	話者 3	話者 4	話者 5	話者 6	話者 7	話者 8	話者 9
生年（年齢）	1941（78）	1943（75）	1933（86）	1934（85）	1941（78）	1939（80）	1936（83）	1947（72）	1936（83）
性別	女性	男性	女性	女性	女性	女性	男性	女性	男性
出身道	慶尚北道	慶尚南道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚北道	父：慶尚北道 母：九州（親：韓国）	慶尚北道

鮮半島全土で行った方言調査を基礎資料として用いる。小倉（1944a，1944b）を基とした2つの言語地図（中井・亀山 2007：福井 2017，2018）を活用し、①慶尚道方言の音韻的特徴が見られること、②日常生活でよく使われる語彙であること、という2つの基準を満たす62項目を選んだ。さらに、金由美（2005）・金美善（2001）や首都圏在住の在日コリアン四世との予備調査を参考にして、オールドカマー独自の音韻・語彙的特徴が見られる語彙・表現74項目を加え、計123項目を本研究の調査語彙とした。

5.2　サハリン調査

調査は、2019年9月にサハリン州ユジノサハリンスク市内で行われた。調査者は4名で、日本語母語話者2名、ロシア語母語話者1名、朝鮮語母語話者1名が含まれる。調査では、相手に応じて日本語・朝鮮語・ロシア語を使用した。

調査対象者は9名で、年齢は30歳～91歳、世代は二世～四世までの人々である。首都圏調査では二世のみを対象としていたが、サハリン調査では二世～四世までの3世代にわたる話者を対象としている。

慶尚道と何らかのつながりがある（移住一世の出身者または配偶者の出生地）話者が、9名中6名（話者2，3，4，5，8，9）と多数派を占める。なお、話者3は両親が北海道出身の日本人であるが、朝鮮人の夫を持ち、朝鮮語話者コミュニティに属しているため、分析の対象に含めた。また、話者6は本人と母親がハバロフスク生まれ、父親は中央アジアのタシケント生まれで、自らを「サハリン高麗人」と認識している。

調査方法は面接式で、面接調査で得られた①アンケート、②語彙調査（翻訳式・なぞなぞ式）を分析する。

表2．サハリン調査のインフォーマント

	話者1	話者2	話者3	話者4	話者5	話者6	話者7	話者8	話者9
生年（年齢）	1928（91）	1934（85）	1956（63）	1962（56）	1972（47）	1978（41）	1989（30）	1988（30）	1989（30）
世代	二世	二世	二世	二世	三世	三世	四世	四世	四世
性別	男性	男性	女性	女性	男性	女性	女性	男性	女性
出生地	サハリン	慶尚南道	サハリン	サハリン	サハリン	ハバロフスク	サハリン	サハリン	サハリン
一世父出身地	江原道	慶尚南道	北海道	慶尚南道	慶尚南道	江原道	韓国/韓国	韓国/慶尚北道	北朝鮮/慶尚北道
一世母出身地	江原道	慶尚南道	北海道	慶尚南道	北海道	江原道	韓国/北朝鮮	韓国/慶尚北道	韓国/韓国
配偶者出身地	韓国	サハリン	慶尚道	サハリン	ロシア	サハリン	–	–	サハリン

基礎資料としては、首都圏調査と同様、日本統治時代の1910年代から1930年代にかけて小倉（1944a，1944b）が朝鮮半島全土で行った方言調査を用いた。調査語彙は、小倉（1944a，1944b）の調査結果を元にした2つの言語地図（中井・亀山 2007：福井 2017，2018）を活用し、以下の4つの基準から選ばれた。

⑴　慶尚道の方言の音韻的特徴がみられること
⑵　平壌の音韻的特徴がみられること
⑶　日常生活でよく使われる語彙
⑷　在日コリアンコミュニティーで使われてきた語彙

本稿では音節核のヴァリエーションについて分析する。日本統治下に作られた朝鮮語の標準語では半母音（/j/と/w/）を含む多重母音で発音されていた音節核が、慶尚道方言などでは半母音無しの単独母音で発音される傾向にあった。

移住当初の慶尚道方言の音韻的特徴が今なお維持されているのだろうか。それとも他地域出身者がもたらした諸方言と接触し、また、首都圏では日本語、サハリンでは日本語・ロシア語とも接触し、変容が見られるだろうか。具体的な検証のため、半母音を含みうる音節核のヴァリエーションに焦点を当てて分析する。

首都圏調査では、調査語彙のうち音節核のヴァリエーションが見られる単語延べ10語（뼈（骨）[ˀpjɔ]など/j/を含み得る単語延べ6語、귀（耳）[kwi]など/w/を含み得る単語4語）を対象とし、計101トークンを分析した。

サハリン調査では、調査語彙のうち音節核に変異が見られる単語延べ37語、合計256トークンを分析した。

6. 分析

6.1　単語間の揺れ

6.1.1　半母音/j/を含む多重母音と単独母音の出現数と割合

表3は在日コリアン二世の半母音/j/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごと・位置ごとに示したものである。

表3において、頭頭と語中で明確な違いを示した。語頭「양념장（ヤンニョムジャン）」[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]では100%半母音/j/を含む多重母音で発音されたが、語中では「뼈（骨）」[ˀpjɔ]以外の4語全てが50%以上、半母音を伴わない単独母音で発音されていた。

続いて、サハリンの朝鮮語話者における単語間の揺れについて見ていく。表4は語頭での半母音/j/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごと・位置ごとに示したもの、表5

表3. 在日コリアンにおける半母音/j/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

位置	語頭	語中	語中	語中	語中	語中	合計
調査語彙	양념장(ヤンニョムジャン) [jaŋ-njɔm-dʒaŋ]		뼈(骨) [ˀpjɔ]	비녀(かんざし) [pi-njɔ]	병아리(ひよこ) [pjɔŋ-a-ri]	며느리(嫁) [mjɔ-nɯ-ri]	（語中）
[j]を含む多重母音	14(100%)	5(35.7%)	6(66.7%)	2(22.2%)	3(50.0%)	2(18.2%)	18(36.7%)
[j]無しの単独母音	0(0.0%)	9(64.3%)	3(33.3%)	7(77.8%)	3(50.0%)	7(63.6%)	29(59.2%)
その他	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(18.2%)	2(4.1%)
計	14(100%)	14(100%)	9(100%)	9(100%)	6(100%)	11(100%)	49(100%)

表4. サハリン朝鮮語話者における語頭に半母音/j/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	양념장(ヤンニョムジャン) [jaŋ-njɔm-dʒaŋ]	육교(陸橋) [juᵏ-ˀkjo]	여우(狐) [jɔ-u]	여자친구(彼女) [jɔ-d͡ʒa-t͡ʃhin-gu]	여학생(女学生) [jɔ-haᵏ-ˀsɛŋ]
[j]を含む多重母音	10(100%)	1(50.0%)	8(100%)	6(85.7%)	6(85.7%)
[j]無しの単独母音	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
その他	0(0.0%)	1(50.0%)	0(0.0%)	1(14.3%)	1(14.3%)
計	10(100%)	2(100%)	8(100%)	7(100%)	7(100%)

調査語彙	예절(礼節) [je-d͡ʒɔl]	여름(夏) [jɔ-rɯm]	양쪽(両方) [jaŋ-ʔt͡ʃoᵏ]	연애(恋) [jɔ-nɛ]	合計（語頭）
[j]を含む多重母音	2(100%)	7(100%)	5(83.3%)	5(83.3%)	50(90.9%)
[j]無しの単独母音	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
その他	0(0.0%)	0(0.0%)	1(16.7%)	1(16.7%)	5(9.1%)
計	2(100%)	7(100%)	6(100%)	6(100%)	55(100%)

は語中での半母音/j/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごと・位置ごとに示したものである。

表4によると、語頭の9語の合計では90%以上が半母音/j/を伴う多重母音で発音されていることが分かる。語頭が多重母音であるものの単語としては方言形であるものが「여우（狐）」[jɔ-u] に対する回答において、[ja-ʃi]、[jɔ-ʃi] として現れていた。また、話者6は「육교（陸橋）」[juᵏ-ˀkjo] への回答で、[rjuᵏ-ˀkjo] と回答していた。話者6の父親はタシケント出身のソ連系朝鮮人であるため、家庭内で北方の方言に接触した可能性があると推測される。

一方、表5の語中について見ると、「양념장（ヤンニョムジャン）」[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]、「별（星）」[pjɔ:l]、「뼈（骨）」[ˀpjɔ]、「비녀（かんざし）」[pi-njɔ]、「며느리（嫁）」[mjɔ-nɯ-ri]、「뺨（頬）」[ˀpjam] の5語において、半数以上が/j/なしの単独母音で回答されている。

首都圏においても、サハリンにおいても、語中では半母音無しの単独母音、語頭では半母音を伴う多重母音が多いという点で共通していた。語頭では半母音を伴う多重母音が多いという結果は、慶尚道方言の半母音/j/は語頭および母音間ではよく現れるが、子音と母音の間では現れないことが多いという出現の制約（趙義成 2007：205）を一部裏付ける。このことは、首都圏の慶尚道出身二世と

表5. サハリン朝鮮語話者における語中に半母音/j/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	양념장（ヤンニョムジャン）[jaŋ-njɔm-dʒaŋ]	새벽（朝焼け）[sɛ-bjɔ^{k}]	별（星）[pjɔ:l]	혀（舌）[hjɔ]	뼈（骨）[ʔpjɔ]	무명（木綿）[mu-mjɔŋ]	비녀（かんざし）[pi-njɔ]	병아리（ひよこ）[pjɔŋ-a-ri]	벼（稲）[pjɔ]
[j]を含む多重母音	1（10.0%）	5（71.4%）	1（16.7%）	3（42.9%）	1（12.5%）	0（0.0%）	1（20.0%）	5（83.3%）	0（0.0%）
[j]無しの単独母音	9（90.0%）	2（28.6%）	5（83.3%）	1（14.3%）	7（87.5%）	0（0.0%）	3（60.0%）	1（16.7%）	1（33.3%）
その他	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	3（42.9%）	0（0.0%）	5（100%）	1（20.0%）	0（0.0%）	2（66.7%）
計	10（100%）	7（100%）	6（100%）	7（100%）	8（100%）	5（100%）	5（100%）	6（100%）	3（100%）

調査語彙	형（兄）[hjɔŋ]	며느리（嫁）[mjɔ-nɯ-ri]	변소（便所）[pjɔn-so]	저녁（夕）[t͡ʃɔ-njɔ^{k}]	겨울（冬）[kjɔ-ul]	뺨（頬）[ʔpjam]	병（病気）[pjɔ:ŋ]	合計（語中）
[j]を含む多重母音	11（91.7%）	4（44.4%）	3（20.0%）	7（87.5%）	5（71.4%）	2（22.2%）	6（85.7%）	55（44.4%）
[j]無しの単独母音	0（0.0%）	4（44.4%）	5（33.3%）	1（12.5%）	0（0.0%）	6（66.7%）	1（14.3%）	46（37.1%）
その他	1（8.3%）	1（11.1%）	7（46.7%）	0（0.0%）	2（28.6%）	1（11.1%）	0（0.0%）	23（18.5%）
計	12（100%）	9（100%）	15（100%）	8（100%）	7（100%）	9（100%）	7（100%）	124（100%）

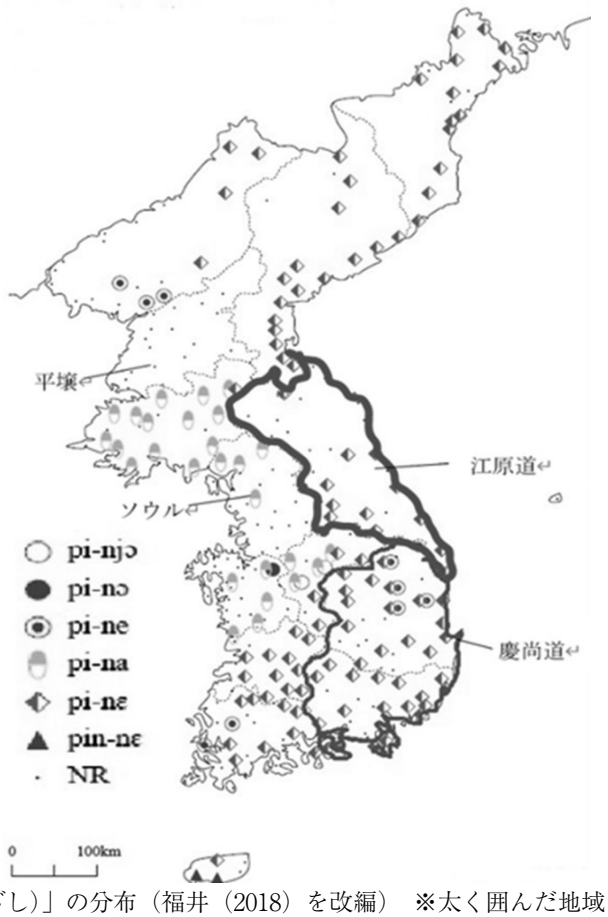

図2.「비녀（かんざし）」の分布（福井（2018）を改編）　※太く囲んだ地域は慶尚道・江原道。

2/3 以上が慶尚道との繋がりのあるサハリンの朝鮮語話者において、慶尚道方言の言語的制約を継承していることを示唆するものである。

次に、表中の調査語「비녀（かんざし）」［pi-njɔ］について、当時の言語地図を用いて考察する。図 2 は、1910 年代から 1930 年代当時の「かんざし」［pi-njɔ］の分布を示した方言地図である（福井 2018：32）。標準形［pi-njɔ］は中央部で僅かに存在しているのみで、多くの移民を送り出した慶尚道、あるいは、サハリンのインフォーマントの出身地で慶尚道に次いで多い江原道では［pi-nɛ］等、半母音のない単独母音が優勢になっている。ソウル周辺では［pi-na］が分布しており、日本統治下で作られた標準語が必ずしもソウルで観察されるわけでないことにも注意されたい。

慶尚道出身の在日コリアン二世 9 名の「かんざし」の発音について見ると、回答された 9 語のうち 7 語が半母音のない単独母音で発音されていた。当時の方言地図上で慶尚道で優勢であった半母音のない単独母音で発音される傾向が強いことから、「平準化」・「創始者効果」を支持していると考えられる。単独母音 7 語の内訳は、6 語が［pi-ne］、1 語が［pi-ne-gi］であった。［pi-ne-gi］は図 2 の地図には見られない語形である。ここからは、首都圏で朝鮮語の諸方言や日本語と接触することによって、在日コリアンの「フィーチャープール」において、インプット方言にはなかった新たな語形が作られた可能性があることが示唆される。多重母音 2 語の内訳は、標準形の［pi-njɔ］である。現代韓国語の要素が「傍層言語要素」として「フィーチャープール」に加わったものと考えられる。

続いて、サハリンの朝鮮語話者 9 名の「かんざし」の発音を見ると、回答数は 5 語と少ないが、そのうち 3 語は、慶尚道や江原道において主流派である単独母音の［pi-nɛ］（80 代・60 代・40 代）で発音されていた。戦前から最も多くの移民を送り出した慶尚道や江原道で多数派の変異形が生き残っていることから、「平準化」・「創始者効果」を支持していることが示唆される。残りの 2 語のうち 1 語は標準形の［pi-njɔ］（50 代）、もう 1 語は「くし」を意味する［piᵗ］（80 代）であった。

次いで、表中の調査語「며느리（嫁）」［mjɔ-nɯ-ri］について、当時の言語地図を見ていく。図 3 は、1910 年代から 1930 年代当時の「嫁」［mjɔ-nɯ-ri］の分布を示した方言地図である（福井 2018：32）。多くの移民を送り出した慶尚道では、［me-nu-ri］などの単独母音［e］で発音される語形、［mi-nu-ri］などの単独母音［i］で発音される語形、［mɛ-ni-ri］などの単独母音［ɛ］で発音される語形が分布している。サハリンの朝鮮語話者の出身地として二番目に多い江原道では［me-nu-ri］が優勢である。また、地図からは、1910 年代から 1930 年代当時はソウルでも多重母音ではなく、単母音［me-nu-ri］で発音されていたことが伺える。

在日コリアン二世の「嫁」の発音についてみると、回答された 11 語のうち、7 語が単独母音で発音されていた。単独母音 7 語の内訳は、［me-nɯ-ri］が 4 語、［mi-nɯ-ri］が 2 語、［me-nɯl］が 1 語となっていた。先に見たように慶尚道では多重母音が単独母音［e］［i］で発音される語形が分布していることから、戦前から最も多くの移民を送り出した慶尚道の多数派の変異形が生き残っていることが分かる。すなわち、ここでも「平準化」・「創始者効果」が裏付けられる。

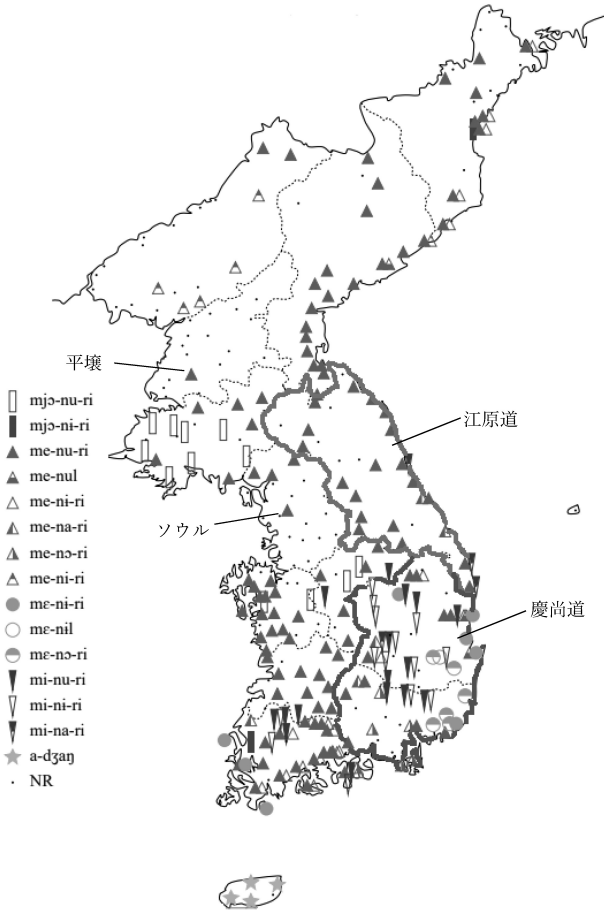

図 3.「며느리（嫁・子の妻）」の分布（福井（2018）を改編） ※太く囲んだ地域は慶尚道・江原道。

多重母音で発音された 2 語は、いずれも［mjɔ-nɯ-ri］と発音されており、現代韓国語が「傍層言語要素」として彼らの「フィーチャープール」に加わったのであろう。

サハリンの朝鮮語話者 9 名の「嫁」の発音については、回答された 9 語のうち、4 語が単独母音、4 語が多重母音、1 語が「その他」で発音されていた。内訳は、［me-nɯ-ri］2 語（90 代・60 代）、［mɛ-nɯ-ri］1 語（80 代）、［mi-nɯ-ri］1 語（40 代）である。これらの語形の単独母音［e］［ɛ］［i］も当時の慶尚道に分布している。高齢層を中心に出身地で優勢であった方言が維持されている。これも「平準化」・「創始者効果」によるものと言えるだろう。

多重母音で発音された 4 語は、すべて標準語形である［mjɔ-nɯ-ri］（50 代・40 代・30 代・30 代）であり、比較的若い世代において「傍層言語要素」としての現代韓国語の影響が見られる。

6.1.2　半母音/w/を含む多重母音と単独母音の出現数と割合

表６は在日コリアン二世における語中に/w/を含む多重母音と半母音無しの単独母音のトークン数と割合を単語ごとに示したものである。結果は二分され、半母音/w/無しの単独母音が50%以上現れた単語は４単語中「귀（耳）」[kwi］と「까마귀（カラス）」[ˀka-ma-gwi］の２語で、残りの２語は「その他」が多かった。後者の「뼈다귀（骨）」[ˀpjɔ-da-gwi］は「뼈（骨）」だけで単語として成り立つため、半母音/w/を含みうる接尾辞［-da-gwi］を用いない語形を回答したことによる。

次に表７は、サハリンの朝鮮語話者における語頭に/w/を含む多重母音と半母音無しの単独母音のトークン数と割合を単語ごとに示したもの、表８は語中に半母音/w/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごとに示したものである。

表6. 在日コリアンにおける語中に半母音/w/を含む多重母音と半母音/w/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	귀（耳）[kwi]	잎사귀（葉）[iᵖ-ˀsa-gwi]	까마귀（カラス）[ˀka-ma-gwi]	뼈다귀（骨）[ˀpjɔ-da-gwi]	合計
[w]を含む多重母音	2（25.0%）	0（0.0%）	2（16.7%）	0（0.0%）	4（10.5%）
[w]無しの単独母音	6（75.0%）	2（22.2%）	10（83.3%）	4（44.4%）	22（57.9%）
その他	0（0.0%）	7（77.8%）	0（0.0%）	5（55.6%）	12（31.6%）
計	8（100%）	9（100%）	12（100%）	9（100%）	38（100%）

表7. サハリンの朝鮮語における語頭に半母音/w/を含む多重母音と半母音/w/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	외할아버지（外祖父）[we:-ha-ra-bɔ-d͡ʒi]	외할머니（外祖母）[we:-hal-mɔ-ni]	외삼촌（母方のおじ）[we:-sam-t͡ʃhon]	왜놈（倭奴）[wɛ-nom]	合計
[w]を含む多重母音	5（83.3%）	5（83.3%）	5（83.3%）	1（33.3%）	16（76.2%）
[w]無しの単独母音	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
その他	1（16.7%）	1（16.7%）	1（16.7%）	2（66.7%）	5（23.8%）
計	6（100%）	6（100%）	6（100%）	3（100%）	25（100%）

表8. サハリンの朝鮮語話者における語中に半母音/w/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	바위（岩）[pa-wi]	가위（はさみ）[ka-wi]	화로（火鉢）[hwa:-ro]	까마귀（カラス）[ˀka-ma-gwi]	잎사귀（葉）[iᵖ-ˀsa-gwi]	종업원（従業員）[t͡ʃo-nɟɔ-bwɔn]	귀（耳）[kwi]	사마귀（あざ、いぼ）[sa-ma-gwi]	合計
[w]を含む多重母音	2（25.0%）	2（22.2%）	2（100%）	5（71.4%）	0（0.0%）	1（33.3%）	5（62.5%）	2（40.0%）	19（36.5%）
[w]無しの単独母音	1（12.5%）	0（0.0%）	0（0.0%）	2（28.6%）	1（10.0%）	0（0.0%）	3（37.5%）	2（40.0%）	9（17.3%）
その他	5（62.5%）	7（77.8%）	0（0.0%）	0（0.0%）	9（90.0%）	2（66.7%）	0（0.0%）	1（20.0%）	24（46.2%）
計	8（100%）	9（100%）	2（100%）	7（100%）	10（100%）	3（100%）	8（100%）	5（100%）	52（100%）

表７を見ると、語頭の４語のうち、「외할아버지（外祖父）」「외할머니（外祖母）」「외삼촌（母方のおじ）」の３語では、８割以上が［w］を含む多重母音で発音されていた。語頭４語すべてにおいて、［w］なしの単独母音の発音は現れなかった。「왜놈（倭奴）」は回答数が少ないが、「その他２語は、［je-nom］、［ˀt͡ʃo^{k}-pal］と発音されており、前者は期待された［w］ではなく［j］を含む多重母音となっていた。

表８の語中に半母音/w/を含む８語についてみると、８語の合計では、［w］無しの単独母音よりも、「その他」や［w］を含む多重母音の割合が高いが、表７の語頭に比べると、語中において単独母音の割合がやや高くなっていた。

次に、表８中の調査語「잎사귀（葉）」［i^{p}-ˀsa-gwi］について、当時の言語地図と照らし合わせて考察する。図４は当時の「잎사귀（葉）」［i^{p}-ˀsa-gwi］の分布を示した方言地図である（中井・亀山2007：231）。凡例では［gwi］が［gui］と表されているので留意されたい。

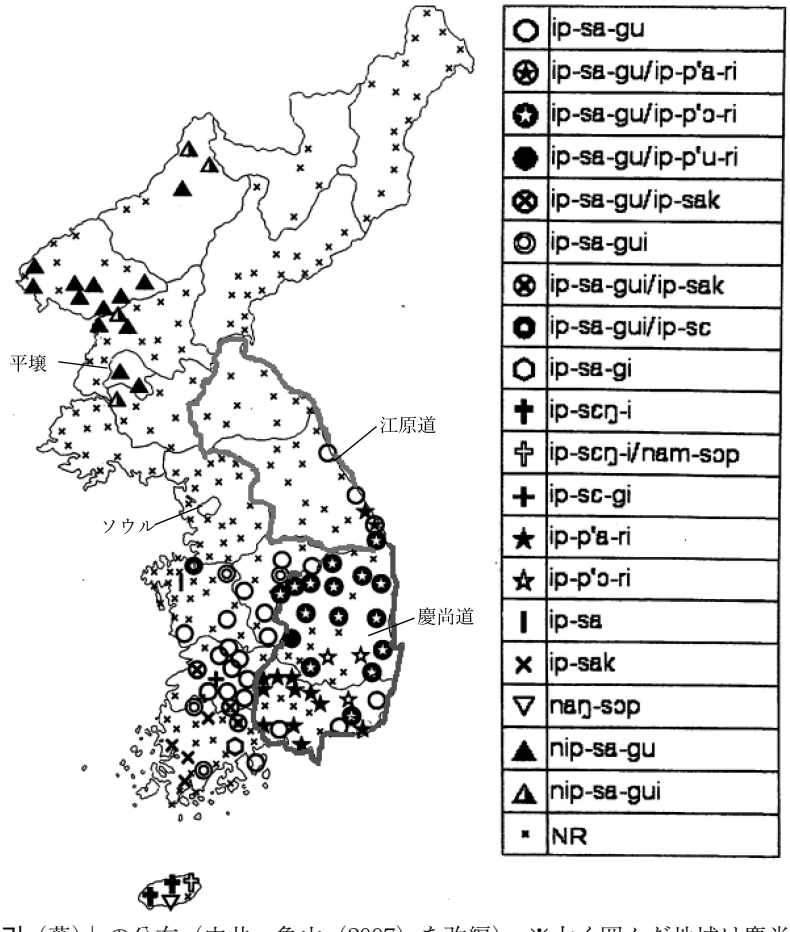

図 4.「잎사귀（葉）」の分布（中井・亀山（2007）を改編）　※太く囲んだ地域は慶尚道・江原道。

「잎사귀（葉）」［iᵖ-ˀsa-gwi］は複数の変異形を持つ単語で、慶尚北道方言では半母音を伴わない単独母音の［iᵖ-ˀsa-gu］が、慶尚南道方言と中部方言では［iᵖ-pʰa-ri］が優勢形であるが、忠清道・全羅道では標準形［iᵖ-ˀsa-gwi］が確認される。

在日コリアン二世９名の発音を分析した結果、慶尚北道出身の親を持つ在日二世であっても、慶尚南道方言と中部方言で使われていた［iᵖ-pʰa-ri］が圧倒的優勢形で、慶尚北道方言の［iᵖ-sa-gu］は少数派であることが判明した。さらに標準形［iᵖ-ˀsa-gwi］を用いた話者はいなかった。このことから、二世は必ずしも親の出身方言をそのまま継承するわけではなく、コリアン集住地などで多様な方言が接触した結果、方言混合が起きていた様子が伺える。これは慶尚南道方言で多数派であった発音が優勢形として二世の間で生き残っていることを示しており、「平準化」が起きていたと推察される。

一方、サハリンの朝鮮語話者９名の発音を見ると、回答された10語の内訳は、［iᵖ-pʰa-ri］６語、［iᵖ-sa-gu］１語、「その他」の形式として、［na-mu-iᵖ］（「木の葉」の意）１語、［ˀkɛᵗ-pʰa-ri］（「ごまの葉」の意）１語、［iᵖ］（接尾辞のない形）１語となっていた。つまり、サハリンの朝鮮語話者においても慶尚南道方言と中部方言で使われていた［iᵖ-pha-ri］が圧倒的に優勢であることが分かった。また、慶尚北道出身の一世を持つ三世も慶尚南道方言と中部方言で使われていた［iᵖ-pʰa-ri］と回答していることも判明したことから、ここでも「平準化」が起こっていたことが示唆される。

次の図５は、表８中の調査語「가위（はさみ）」［ka-wi］の当時の分布を示した方言地図である（中井・亀山 2007：159）。標準形の［ka-wi］はソウル周辺で散在し、白丸の［ka-sɛ］が南北に広く分布している。移住者を多く出した慶尚道では黒い縦長の丸［ka-ʃi-ge］が優勢となっている。はさみ［ka-wi］の音節核は、［u］［e］［we］［wi］の変異形を持つということが分かる。慶尚道と江原道では、［ka-ʃi-ge］や［ka-sɛ］など［ka-wi］とは別系統の語形が現れている。

「가위（はさみ）」［ka-wi］は、サハリンでのみ調査を行った語であるため、サハリンの朝鮮語話者の調査結果を見ていく。方言形は、７語回答された。内訳は、［ka-sɛ］４語、［ka-ʃi-ge］１語、［ka-ʃwe］１語、［ka-ʃi-ri］１語である。地図上で慶尚道に多く分布していた［ka-ʃi-ge］は１語であるのに対して、より広範囲に分布していた［ka-sɛ］の回答の方が多くなっていた。また、［ka-ʃwe］と［ka-ʃi-ri］は当時の方言地図には存在しない発音である。このことから、慶尚道［ka-ʃi-ge］と標準形［ka-wi］の両変異形の要素を取り込んだ「中間方言形」が作られていた可能性があることが示唆される。

6.2　話者間の揺れ

6.2.1　在日コリアンにおける話者間の揺れ

図６は半母音の/j/と/w/を含み得る単語の全トークンの発音について、話者ごとに示したものである。

結果は、韓国へ短期留学の経験を持つ話者８を除く全話者で、単独母音のトークン数が半母音を含む多重母音のトークン数を上回っていた。つまり一世の出身方言の特徴である半母音無しの単独母音

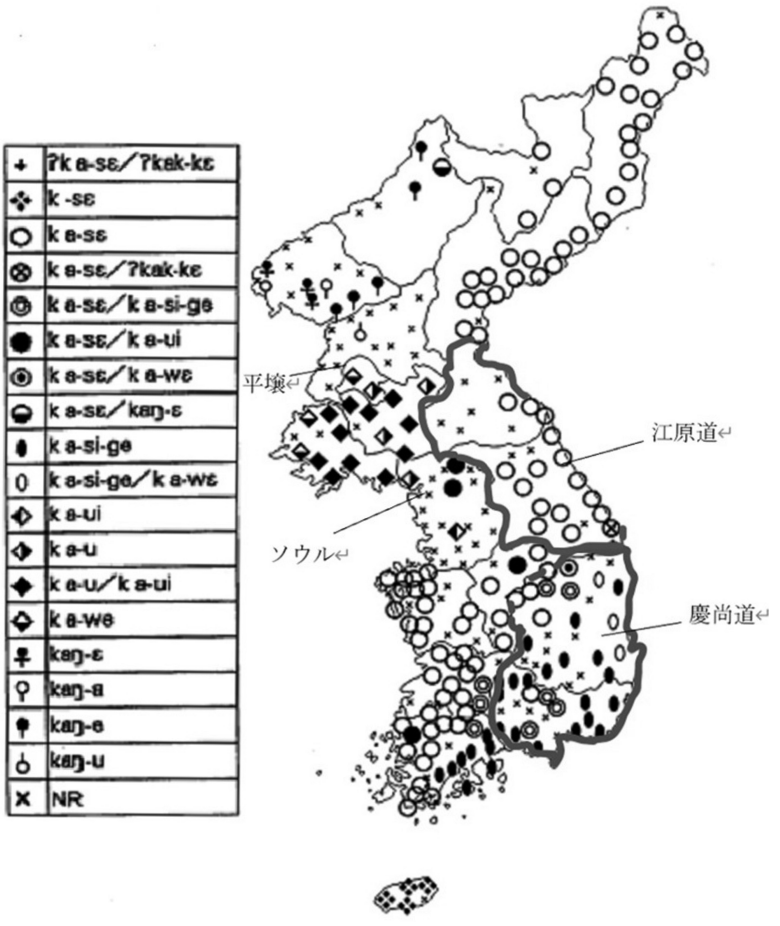

図 5.「가위（はさみ）」の分布（中井・亀山（2007）を改編）　※太く囲んだ地域は慶尚道・江原道。

が優勢形として二世において生き残り継承されていることを示している。

特に半母音を用いなかった話者 1・3 は言語形成期を在日コリアン集住地で過ごし、結婚後もしばらくは朝鮮語を家庭である程度用いていたという共通点がある。

対照的に半母音を含む多重母音を多く使用した話者 5・7 は、朝鮮語学校やラジオ番組を通じて朝鮮語を学習した経歴を持つとともに、民団や道民会への参加も積極的でニューカマーとの交流の機会が多く、韓国の親戚に会いに頻繁に訪韓しているという共通点を持つ。

つまり前者はかつての慶尚道出身者が集う家庭や近隣で朝鮮語を使用していたため当時の慶尚道方言がそのまま記憶に残っているが、後者は現在に至るまで朝鮮語を使い続ける中で現在のソウルやその他の地域からの多様なインプット要素が話者の「フィーチャープール」に取り混まれたことが考えられる。

なお朝鮮学校へ通っていた話者を含め、今回の調査で当時の平壌の変異形、例えば［pɛŋ-a-ri］（ひ

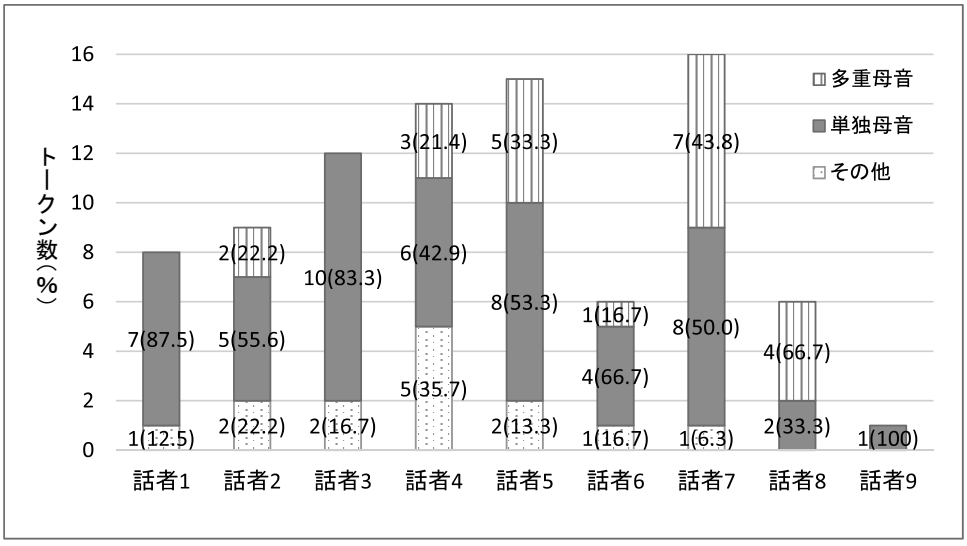

図 6. 在日コリアンにおける多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

よこ）や［ni^{p}-sa-gu］（葉）を用いた話者はいなかった。現在の韓国にルーツを持つ在日コリアン二世の中で朝鮮語が流暢な話者が、北朝鮮の変異形ではなく現在のソウルの変異形を「フィーチャープール」に取り込む傾向があることは理にかなっていると言えるだろう。

在日コリアンの調査結果において、さらに特筆すべき点として、日本語の要素が今回の調査語の発音の中でわずかながら観察されたことが挙げられる。例えば「양념장（ヤンニョムジャン）」［jaŋ-njɔm-dʒaŋ］の第二音節末の子音は［m］と［n］が混在し、「뼈（骨）」［ˀpjɔ］の語末の母音は［ɔ］だけでなく［o］の発音も観察された。二世にとって優勢言語である日本語からの「外来言語要素」が話者の「フィーチャープール」に取り入れられ採用されたと考えられる。また「까마귀（カラス）」［ˀka-ma-gwi］の語頭は方言形［ˀka-ma-gu］、標準形［ˀka-ma-gwi］のいずれにおいても［ʔ］が入るが、在日コリアン二世は、［ʔ］を発音せず［ka-ma-gu］と日本語風に発音するケースが多々見られた。

6.2.2　サハリンの朝鮮語話者における話者間の揺れ

図 7 は半母音の/j/と/w/を含み得る単語の全トークンの発音について、話者ごとに示したものである。

話者間でトークン数に違いはあるものの、ほぼ全話者において半母音を含む多重母音の占める割合が高いという共通性が見られた。ただし慶尚道の方言においても語頭では半母音を含む多重母音を用いることから、単純に標準形へ収斂していると結論付けるのは尚早であるかもしれない。このことを検証するために、母音の位置、すなわち語頭か語中かによって多重母音と単独母音の割合がどのように変わるのか見ていく。

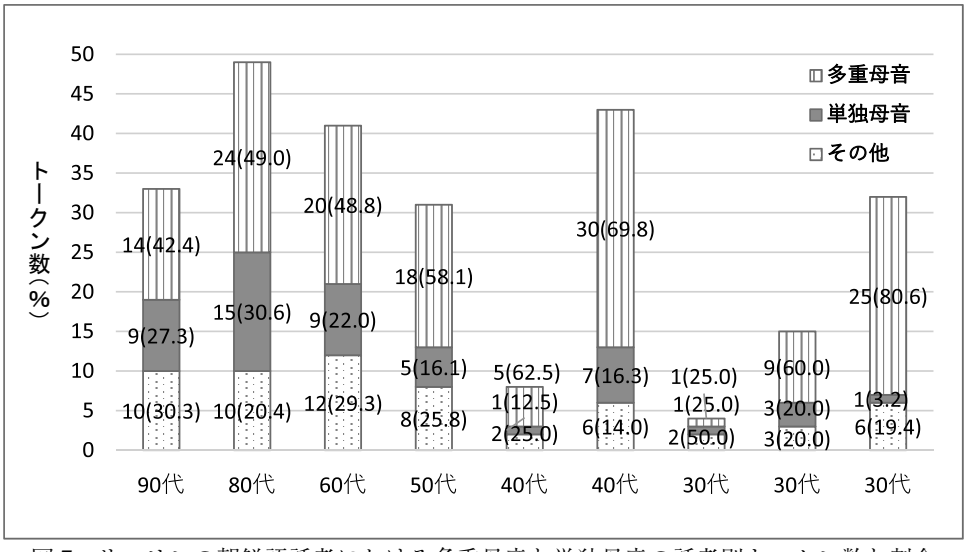

図 7. サハリンの朝鮮語話者における多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

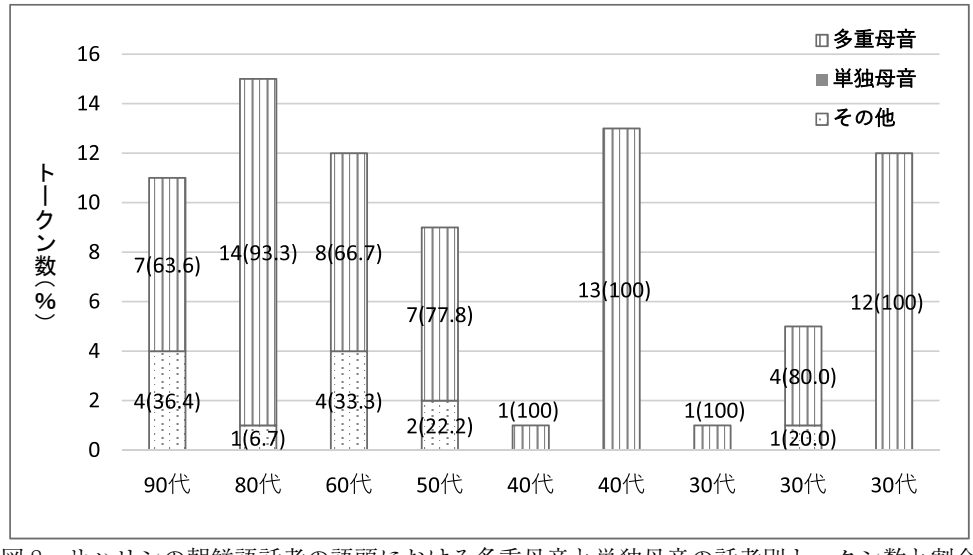

図 8. サハリンの朝鮮語話者の語頭における多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

図 8 の語頭における発音を見ると、総じて多重母音の割合が高いことが分かる。慶尚道の方言において語頭では/j, w/を含む多重母音がよく用いられると言われているが、今回の調査結果においても語頭では多重母音が用いられやすい傾向が強いと言える。

一方、図 9 の語中の位置では、語頭の場合と異なる傾向を見せる。語中では、語頭に比べて、多重母音の割合は低くなり、単独母音およびその他、すなわち方言形の割合が高くなっている。

図 9 では、特に 90 ～ 60 代では方言形である単独母音や「その他」がほぼ過半数を占めている。このことから高齢層ほど方言形を保ち、世代が進むにつれて現代の韓国語の影響が強まる傾向が伺える

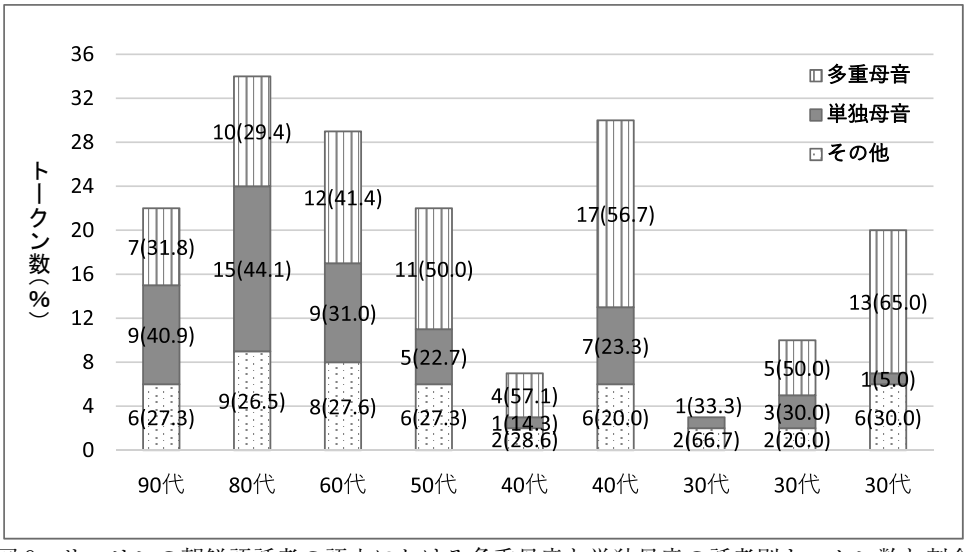

図 9.　サハリンの朝鮮語話者の語中における多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

が、検証のためにはより多くのデータが必要である。

ただし、「辛いタレ」を意味する「양념장（ヤンニョムジャン）」［jaŋ-njɔm-dʒaŋ］に関しては、四世も含めた 9 名全員が、慶尚道の方言形の［jaŋ-nim］を回答していた。朝鮮半島の食文化が現地で浸透しているため、ロシアを母語とする若い世代の間でも方言形の［jaŋ-nim］が借用語として定着していることが示唆される。

さらに、サハリンの朝鮮語話者の調査では、「陸橋」「便所」「お兄さん」などのように日本語で回答される例も散見された。特に「便所」については 2 名の四世が家庭内で使われていたと記憶していた。このことから、彼らの「フィーチャープール」に「外来言語要素」として日本語も加わっていたことが分かる。

7.　おわりに

20 世紀前半に移民によって朝鮮半島各地からもたらされた朝鮮語の諸方言が、首都圏および日本領樺太の地で接触・混合し、さらに現地の日本語やロシア語等との接触も加わりながらどのようなコイネーが形成され、戦後から現在までの間にどのように変容しているのか。本稿ではこのような研究の中間報告として、首都圏およびサハリンの朝鮮語における音節核のヴァリエーションの事例を取り上げ、考察した。

その結果、首都圏の慶尚道出身の在日コリアン二世については、移民一世がもたらした朝鮮語の諸方言が首都圏の家庭やコリアン集住地で接触した結果、方言混合が起こり、二世は一世の親の出身地の変異形のみならず、多様な変異形を含む「フィーチャープール」を保持している事例を示した。さらに韓国ドラマや訪韓などによってソウルやその他の地域で使われている変異形を取り入れている話

者もいること、二世にとっての優勢言語である日本語からの「外来言語要素」も観察されることを示した。全体的には、習得した有標の変異形は生き残らず、幼少期に両親や集住地の隣人等から最も多くインプットされていた慶尚道方言の変異形が大半を占めるため、多数派の変異形が生き残るという「平準化」が起きていたと考えられる。初期の移民の多数派の方言が二世の朝鮮語変種の基盤を成すことから「創始者効果」も支持することが示された。

次に、サハリンの朝鮮語話者については、移民一世がもたらした朝鮮語の諸方言が樺太で接触した結果、方言混合が起こり、どのインプット方言にも存在しない「中間的な方言形」が生まれた事例を示した。また、移民の出身地として多数派を占めた慶尚道方言をはじめ、当時の朝鮮半島で優勢形であった方言形が生き残るという「平準化」が高齢層の間で起きていた事例を提供した。樺太時代の初期移民の多数派の方言が現在のサハリンの朝鮮語変種の基盤をなしていることから「創始者効果」も支持すると言える。彼らの「フィーチャープール」に関しては、近年の現代韓国語の学習や祖国との往来などから、ソウル等で使われている変異形が「傍層言語要素」として取り入れていることも実証的に示した。「外来言語要素」としてロシア語からの影響は今回のvariableには現れなかったが、同時に進めている樺太日本語のコイネー化の研究（松本・吉田・高田・奥村 2021）ではロシア語の影響も実証されたため、今後も注視していきたい。30 代から 90 代までの、見かけ上の時間を用いた分析結果から、高齢層ではコイネーが形成されていたものの、若年層ではコイネーを継承しつつも現代の韓国語の要素が増加する傾向を示した。

最後に、首都圏とサハリンの朝鮮語の音節核のヴァリエーションを対照した結果、在日コリアン二世およびサハリンの高齢層において、移民の多数派を占めた慶尚道方言の変異形が優勢であったことから、どちらの朝鮮語変種においても「平準化」が起きていた点、また、初期の移民の多数派の方言が、在日コリアンおよびサハリンの朝鮮語変種の基盤をなしていたことから「創始者効果」が示された点などに共通点が見られた。

また、在日コリアンの「フィーチャープール」でもサハリンの朝鮮語話者の「フィーチャープール」でも、親の出身地の変異形のみならず、他地域出身者の変異形も受容するという「方言混合」が起きていたことが示された。在日コリアンにおいてもサハリンの朝鮮語話者においても、「傍層言語要素」として韓国ドラマや訪韓などによる現代韓国語の影響が見られた。これらの点は、在日コリアンと在樺コリアンの音節核のヴァリエーションに関する共通する特徴だとみなすことができる。

在日コリアン二世のみに見られた特徴としては、彼らの優勢言語である日本語の発音の影響が挙げられる。「傍層言語要素」としての北朝鮮の変異形は、当時、南部と北部地域で同じ変異形が分布していた場合（「嫁」）に限り見られたものの、それ以外には今回のデータからは観察されなかった。

サハリンの朝鮮語話者のみに見られた特徴としては、ソ連系朝鮮人の父親を持つ話者で北朝鮮の発音である語頭の［ɾ］音が見られたこと、どのインプット方言にも存在しない「中間的な方言形」が生まれていたこと、四世にも文化借用として方言形［jaŋ-nim］が用いられていたこと、樺太時代に

朝鮮語の中で使われていた日本語の単語が四世にも残っていること、などが挙げられる。

個別性とされた部分は、今回の調査対象者、つまりインフォーマントの特徴によるところも大きい。すなわち、在日コリアンは二世のみを、サハリンでは二世～四世を対象としていたことによる影響である。また、サハリンの朝鮮語話者は、先述した通り、移住の経緯によって、先住民、ソ連系朝鮮人、北朝鮮からの派遣労務者の３グループに分けられる。今回の調査では主に先住民の話者が対象であったが、ソ連系朝鮮人を父に持つ話者が１名加わったことによって、北朝鮮の文化語の影響を受けたであろう語頭の［ɾ］音が観察された。

最後に本研究の課題について述べる。第一に、調査語彙の選定についてである。首都圏調査とサハリン調査の調査語彙は一部共通するが、同一ではない。そのため、首都圏調査とサハリン調査での分析対象語の数が異なっていた。言語環境についても偏りが生じ、語頭よりも語中の位置に半母音を含む単語が多かった。また、語中の位置において、子音と母音の間に半母音を含む単語のみを含み、「이야기（話）」［i-ja-gi］等のような母音と母音の間に半母音を含む単語は含めていなかった。今後は言語環境をより考慮しながら、調査語彙を選定する必要がある。第二に、首都圏調査とサハリン調査では、インフォーマントの出身地・世代等の内訳が異なっていた。今回のサハリン調査では、朝鮮系ソ連人の話者が１名のみで、その話者にだけ北部方言の要素が見られた。今後はインフォーマントを増やすことにより、朝鮮系ソ連人の話者が他地域の方言形を採用しているか、逆に先住朝鮮人であっても戦後開校された朝鮮民族学校での教育を通じて、北部の方言を採用しているかどうか等、より詳細に考察していきたい。

今後は各集団のインフォーマントの出身地や世代などの条件を揃えてデータを収集し、言語内的・言語外的要因との関連性を詳細に分析したい。

謝辞

本研究は跡見学園女子大学の国内留学の制度を利用し、東京大学で行った研究成果の一部である。また、JSPS科研費（20K00551）「在日コリアンおよび在樺コリアンにおける言語接触・方言接触に関する社会言語学的研究」およびアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題（移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究）の成果の一部である。在日コリアンの調査では、東京大学の張暎洙さんとお祖母様、慶尚北道道民会婦人部会長の金仁淑様、民団文京区婦人会会長の金恩淑様をはじめとする皆様方からご支援を賜った。サハリン調査では、日本サハリン協会の斎藤弘美氏やユジノサハリンスク日本センターの鏡芳和氏をはじめ、関係各位からご支援いただいた。また、首都圏およびサハリンで本調査に快く応じてくださった皆様に改めてお礼申し上げる。Valeriya Fajst氏、金廷姫氏には現地調査でロシア語と朝鮮語母語話者として協力してもらった。奥村晶子氏には分析において有用なコメントをもらった。また初稿段階の発表（第44回社会言語科学会研究大会および日本地理言語学会第二回大会）では多くの有益なコメントを頂戴した。ここに感

謝の意を表する。

参考文献

朝日祥之（2012）『サハリンに残された日本語樺太方言』，明治書院

アナトーリー・T・クージン（1998）『沿海州・サハリン　近い昔の話 翻弄された朝鮮人の歴史』，凱風社

李翊燮・李相億・蔡琬（2004）『朝鮮語概説』，大修館書店

李月順（2016）「サハリンにおけるコリアンディアスポラに関する一考察」『東アジア研究』64

李炯喆（2016）「植民地支配下の朝鮮語」『研究紀要』1

大沼保昭（1992）『サハリン棄民』，中公新書

小倉進平（1944ab）『朝鮮語方言の研究』上下巻，岩波書店

韓国学中央研究院（2021）「サハリン韓人社会」http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0026095（最終閲覧日：2021 年 11 月 27 日）

康貞姫（2003）「言語接触と言語変化―大阪居住の済州方言話者集団における日本語との接触現象について―『東アジア研究』37，大阪経済法科大学アジア研究所

金美貞（2008）「日本語と朝鮮語の接触について」『日本語學研究』23

金美善（2001）「在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究：大阪市生野周辺をフィールドとして（平成十二年度博士論文），大阪大学文学研究科日本専攻

金由美（2005）「残存韓国語語彙の様相―ある在日 2・3 世の場合―」『在日コリアンの言語相』（真田信治・生越直樹・任榮哲編），和泉書院

熊谷明泰（2006）「賞罰表象を用いた朝鮮総督府の『国語常用』運動:『罰札』、『国語常用家庭』、『国語常用章』」『関西大学視聴覚教育』29

真田信治（2007）「樺太（サハリン）における言語生活を垣間見る―残留コリアンHさんの事例から―」『國學院雑誌』108（11）

在日本大韓民国民団（2021）「在日同胞社会https://www.mindan.org/syakai.php（最終閲覧日：2021 年 12 月 13 日）

宋実成（2010）「在日朝鮮人による朝鮮語の継承・使用について―幼少期に渡日した 1 世と日本で生まれ育った 2 世の事例―」『ことばと社会：多言語社会研究』12，三元社

趙義成（2007）「慶尚道方言とソウル方言」野間秀樹（編著）『韓国語教育論講座』第 1 巻，くろしお出版

坪江汕二（1965）『在日本朝鮮人概況』巌南堂書店

中井精一・亀山大輔 編（2007）『朝鮮半島言語地図』，富山大学

朴亨柱（1990）『サハリンからのレポート―棄てられた朝鮮人の歴史と証言』，御茶の水書房

福井玲 編（2017）（2018）「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈―第 1・2 集」，東京大学人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室

松本和子（2016）「社会言語学の研究動向と方言研究との接点―接触日本語変種の研究を中心に―」『方言の研究』2

松本和子・奥村晶子（2019）「在日ブラジル人移民のコイネー形成―方言接触，創始者効果，フィーチャープールの検証―」『社会言語科学』22（1）

松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち（2021）「見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化」『日

本方言研究会第 113 回研究発表会発表原稿集』33−40.
松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子（2021）「樺太日本語方言の変容―朝鮮語・ロシア語との言語接触から―」『日本語学会 2021 年度秋季大会予稿集』7−12.
吉田さち・松本和子（2020）「在日コリアンの方言接触　―二世の事例研究―『跡見学園女子大学文学部紀要』55
吉田さち･松本和子（2020）「サハリンの朝鮮語話者コミュニティーにおける方言･言語接触―音節核のヴァリエーションに関する事例研究」『日本地理言語学会第二回大会予稿集』
吉田さち・松本和子・金廷姫（2020）「在日コリアン二世の方言接触―首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から―」『第 44 回社会言語科学会研究大会発表論文集』
Britain, D. (2018) Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg et al. (eds.), Handbook of dialectology. Oxford: Blackwell.
Fajst, V, & Matsumoto, K. (2020) Incorporation and localization of Japanese and Korean loanwords into Russian as a result of language contact on Sakhalin. Asian and African Languages and Linguistics, 14.
Matsumoto, Kazuko, & Britain, David. (2003) Contact and obsolescence in a diaspora variety of Jaanese: The case of Palau in Micronesia. *Essex Research Reports in Lingu istics*, 44, 38−75.
Matsumoto, Kazuko, & Britain, David. (2022) The vernacnlarity of Palauan Japanese. *International Journal of the Sociology of Longuage*., 273(1), 103−144.
Mufwene, Salikoko S. (1996) The founder principle in creole genesis. *Diachronica*, 13(1), 83−134.
Mufwene, S. (2001) The ecology of language evolution. Cambridge: Cambridge University Press.
Mufwene, S. (2008). Language evolution: Contact, competition and change. London: Bloomsbury.
Schneider, E. (2007) Postcolonial English: Varieties around the world. Cambridge: CUP.
Trudgill, P. (1986) Dialects in contact. Oxford: Blackwell.